

## 父と私

現存する、小倉屋の写真には、栗林静助（十三代 祖父）鶴吉（十四代 父）繁子（長姉）のほか、滝野川の叔父さん、池田信一、勝民さん（母の長兄と甥）が写っている。繁子の年頃からすると昭和七年頃撮影されたものと思われる。父の兄弟三人のうち、所帯を持ったのは父一人なので、栗林を名乗る親戚は少ない。滝野川の叔父さんと三角堂は十二代の半右衛門の弟にあたる人です。三角堂はうちでは飯田町と呼ばれ、叔父さんは早くなくなり、叔母さんが富士見小学校のそばで文房具屋をひらいて生計をたて、幾子さんを女学校に通わせていました。

父は幼い頃、五軒町の小菅元吉という家に一度、養子にだされ次兄が亡くなったので復縁したひとでした。幼い頃育てられたのは、小菅の長女の嫁ぎ先の日本橋大伝馬町の繻子問屋の大沼という家でした。私は父に連れられて、何度か大沼を訪ねた事があります。大きな店の奥が台所で、厚いガラスの天窓のある家でした。同年配の男の子もいて、座敷で遊んだ記憶があります。父は下町が好きだったらしく、王子電車（現在の都電荒川線）に乗って滝野川の家を訪ね、帰りに「名主の滝」や飛鳥山をまわるとか、大沼へ行く途上、両国国技館とか浅草にも連れて行ってくれました。国技館のままで紙相撲の玩具を買って貰った記憶があります。飯田橋の「三角堂」も親戚でしたが、父と訪ねた記憶はありません。おじさんが早く亡くなっているので、遠慮があったのかもしれませんが、父と訪ねた記憶は幾子さんは彼岸や「お盆」に必ず寄られるので、姉ふたりが連れだって飯田橋まで出かけておりました。私も、何度かついて行きましたが、小さい僕には遠すぎました。

穴八幡様の前の三朝庵は、父の小学校友達だということで、銭湯のかえりによく寄るようでした。家の向かいに「保志の湯」という風呂屋があり、ふだんはここを使っておりました。八幡坂の途中に「天徳温泉」という一風かわった銭湯があって、中に橋があったり、薬湯があったりして父は好んだようです。雨の多い日など「鶴ちゃんたのむヨ、向かいがあぶないヨ」と三朝庵の小父さんがやってきます。馬場下には川を暗渠にしたところがあつたり、大雨が降ると水がでるのです。父は金時の小父さんや、本橋さん、宮崎の金物屋さんたちとカッパをきて手伝いに行くのです。

父とも母とも、出かけるときは十三番の都電、江戸川橋まであるいて乗る都電とか王子電車とかの思い出が多く、省線（JR線）に乗せてもらった記憶はない。その頃、豊島園と読売遊園地にもいった。読売遊園地には、高いパラシュート降下塔があつたのを覚えているけれど、ほかになんの記憶もありません。

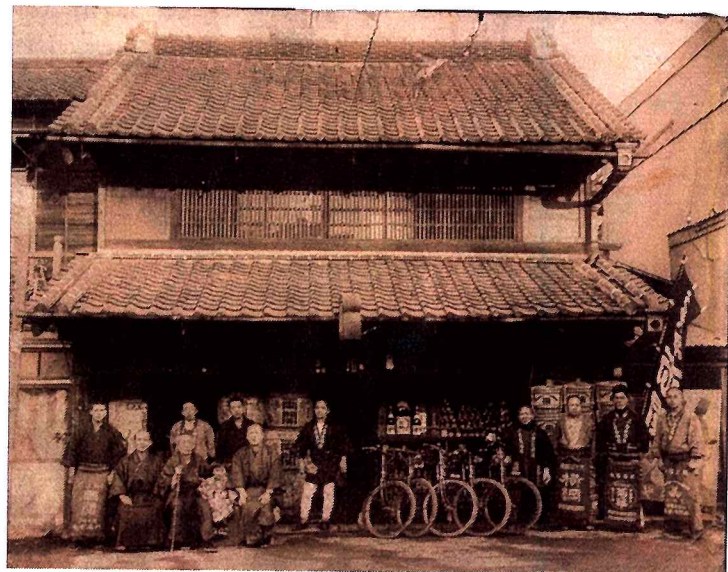
豊島園には水田文房具店の小父さんに連れていって貰ったのかもしれない。池袋から武蔵野電車に乗っていった。ほとんどの遊具は動いていなかった。乗せて貰ったのはウォーターシュートだけ、法被をきた船頭さんが威勢よく、竿をもったまま、飛び上がっていました。この頃、上野の動物園にも行ったが、珍しい動物はキリンやラクダぐらいで、象もライオンも虎ももういませんでした。

いちど、飯田橋から船に乗り、大森海岸の漁師の家に行ったことがある。角さんという問屋の外交さん父子と、姉たちや三角堂の幾子さんも一緒でかなりの大人数だった。途中で船頭さんが網を投げ、真っ白な「ギンシヤリ」と真っ黒な海苔が食事にでた。その鮮やかな対比が今でも、目に焼きついている。もう、白米が貴重なものになっていたので。酒場とか国民酒場とかの酒と離れない生業だったせいか、その後も食べ物でさした苦勞をしているようには、子ども心には見えなかったが、実状は

どうだったのだろう。物物交換で食べ物も手にいれることができたのです。

三つ違いの妹慶江がいて紀元二千六百年の紀元節（昭和十六年二月十一日）の生まれでした。お客さんにとても可愛がられた子供で、運送屋の海藤さんにはとても良くなつていました。十八年の三月の末、夜急に具合が悪くなり、かかりつけの中山先生がお留守で、母と姉が介抱しているあいだ、父は早稲田町の観野病院や岡崎病院をはしりまわり、やっと、喜久井町の顔に大きな痣のある先生をみつけて来ました。しかし、脳膜炎を併発して、翌日亡くなりました。氷を買いに走ったり、母と二人で一晩中、寝ずに看病をしたにもかかわらずでした。

戦争が激しくなると、父の年齢の人たちも召集されて軍隊に行く人が増え始めました。父の友人の三朝庵の小父さんも幟や軍歌に送られて入隊していきました。「俺とおなじ第二乙なのに」と父と母が夜、話をしているのを聞いたことがあります。心配だったのでしよう。その後、父は体調を悪くし、水道橋の堀内胃腸病院に入院しました。かなり、長く入院していて、若松町から姉たちと都電に乗って何度も見舞いにきました。隣組のおつき合いは父が勤めていたので、母の役目で僕も回覧板を持って「トントン、とんからりと隣組、まわしてちょうだ



い回覧板」と舌足らずで歌いながら、お手伝いをしたつもりでいました。

昭和二十年五月、戦災で家が焼けた日、父は消火のため警防団を指揮していて逃げそこなったそうです。向かいの成木屋さんの前の自動車の陰で、身体のおちこちにドロの泥をぬり、逃げ回りやっと思かっただけで、顔に軽い火傷をおいました。八月のはじめ、集団疎開の寮へ

「もう、ここまできたら、日本中どこにいても同じだから、親子一緒にいた方がいい」と迎えにきてくれた時は、まだ火傷のあとがありました。平和になったとはいえ、戦後の混乱のなかで家族六人、一面焼け野原の中からの再出発は大変だったろうと思います。いい年輩の父だったと考えがちですが、数えてみると、まだ四十前です。日本中がみんなそうだったといえ、それまでですが、本当によく頑張ってくれたものです。もちろん、食料の配給も遅れがち、キューバ産の虫のついた砂糖や米軍の携帯口糧までが主食として配給になり、ラジオの番組に「今日の配給だより」があつた頃です。飢えさせずに家族に食べさせ、着せることが大変だったので。小澤昭一さん流のいい方をすれば、うちの父ばかりでなく、あの頃の「日本中のオトウサン、有り難う」です。この頃、銭湯も燃料不足で男女一日おきの営業で、思つた日に入浴するには随分遠くまで歩いて行かねばなりません。父に連れられて、山吹町や豊橋の向こうまで行くこともありました。冬の寒い夜、提げた手ぬぐいが棒のように凍ってしまうことも、珍しくはありませんでした。

昭和二十年八月父に連れられて東京にもどりました。高田馬場駅のホームからは大隈講堂の時計台がすぐ近くに見える、諏訪町の玄國寺から野津運動具店にかけてが、わずかに焼け残り、遠く後樂園の方まで、望むことができず。駅前はまだ都電もなく、戦後は道の両側に闇市が立つようになりました。ここでは、鉄兜で作った鍋とか、電気パン焼器、イモ飴、海産物などがよく売られていました。早稲田日活から都電早稲田車庫前にも闇市はありま

した。また、豊橋の脇を入ったところに小さな旅館を模様替えして「ゆたか」という寄席ができ連れられていったこともありませう。ずいぶん後に知ったことだが、ここが青島幸男さんの実家だったとのこと。作品「人間万事・丙午」に書かれています。

山吹町の「松の湯」は焼けトタンのバラック建てで、浴槽も洗い場も一つで、一日おきで男女交代制の営業でした。

憲法発布記念で一世帯に酒が二合宛特配になったり、たばこの「ピース」が自由販売されるようになり、発売日に行列ができるようになったのは、昭和二十二、三年頃になってから、家が国民酒場、三朝庵が麵類食堂で復活したのも同じ頃のこと。

戸山高校二年生の二学期終業の日、家に帰って父に成績が落ちたので「勉強もしないで、運動をしたり、山へ行ったりしているからダ・・・」叱られて、奥でふてくされていた。すると店先が騒がしくなった。「お宅の息子さんが、西穂高で遭難、死亡されたようです。学校に連絡がはりましたので・・・」と大きなこえがする。のぞいて見ると、担任の中金先生と数学の武藤先生がたっている。父は今にも倒れそうにあおい顔をしていました。後に「お前には、サンザン心配をかけられたが、あの時ほどビックリしたことはない。」と、よくいわれたものです。昭和二十九年十二月二十四日クリスマスイブのことでした。この事故で僕の親しい友人が四人遭難し亡くなったのです。

昭和三十二年七月、父は突然倒れました。前日夜遅くまで、酒屋の集まりから帰り、朝一回起きあがり、まだ、家にいた僕に二、三お使いを言いつけ寝てしまい、鼾をかき、おきあがれませんでした。意識は回復しましたが右手、右足と言葉は、昭和五十年に亡くなるまで不自由でした。その後、酒屋の道に入った僕には、何一つ教えることはできず、ただ見守ってくれるだけでした。